

【下記は当時の活動報告書（ガリ版刷）にあった私の記録です。氏名はイニシャルに修正）】

大学1年（19歳）の時の文章で、40数年後に読むと気恥ずかしさもありますが、報告書からそのまま書き写しました。

=====

1978年南アルプス南部縦走（昭和53年12月21日～1月1日）

CL.S.U(3年生), M.W(3年生), S.S(3年生), A.K(1年生), S.H(1年生), S.Y(1年生),
S.M(1年生) 7名.

12月21日【快晴】

千頭駅7:45－（タクシー）－8:30 林道入口－（途中トラックの荷台に便乗）－10:05 大根沢出合 11:00
－幕営地

丸一日かかると思われた寸又川林道で、トラックに便乗でき、時間短縮。この高度では雪が少なく水に苦勞。

12月22日【快晴】

6:55 発－9:50 樺沢山 10:05－百俣沢の頭 14:30－15:00 幕営地（2400m）

樺沢山付近から雪が多くなる。部分的にラッセル。

12月23日【曇のち雪】

7:30 発－光岳 10:30－11:30 光岳小屋

光岳に立ってようやく主稜に出る。雪も深い。数人が風邪で調子が悪く半日行動。

12月24日【晴のち曇】

7:30 発－易老岳 12:50－15:15 幕営地(2352m ピーク付近)

光岳小屋周辺は地形が複雑。はるか遠くに聖岳を見る。ともかくラッセルに終始した一日。

12月25日【快晴】

7:30 発－茶臼岳 12:30－15:00 上河内岳前のコル幕営(2500m)

茶臼岳までは今回一番苦しかったラッセル。茶臼岳でやっと樹林帯より抜け出る。天場より見上げる上河内岳は堂々としてマッターホルンに似ていた。

12月26日【快晴】

7:50 発－9:20 上河内岳－13:00 聖平小屋

右手に一日中 富士山を眺めての行動。午後は風邪をひいている数人のために休養日。日なたぼっこをしながらの昼寝が快い。

12月27日【晴のち曇、ガス】

7:10 発—聖岳 12:10—16:05 兎岳避難小屋

初めての3千メートルピーク聖岳は、ガスのため何も見えず。兎岳への尾根は部分的にかなり悪く思った以上に時間をくう。入山以来1週間ぶりに他のパーティに会う。ただここまでも全くトレースなしであったが、このあとも赤石岳までトレースはなかった。(幸運?)

12月28日【ガス、時々雪】

7:25 発—兎岳山頂 7:40—9:10 中盛丸山 9:25—大沢岳 11:15—百間洞 12:25—百間平 14:10—15:30 赤石岳手前 2800m 付近に幕営

ガスの中をただひたすら歩く。時々見かける雷鳥に心なごむ。百間平はホワイトアウトであったが、リーダーの適切な判断で無事幕営予定地に着く。

12月29日【雪時々晴、風強し】

8:10 発—9:45 赤石岳避難小屋

強風の中、避難小屋に逃げ込み、小屋内の雪を掻きだして幕営。夜中にマイナス35℃を記録。

12月30日【曇のち晴】

9:00 発—9:15 赤石岳山頂—11:50 荒川小屋 12:20—12:40 稜線上のコルに幕営

赤石岳避難小屋から山頂までのわずか数十メートルは、猛烈な風で10分近くもかかった。しかし反対側は風も弱く天気も良かった。小赤石尾根の雪稜がすばらしい。

12月31日【快晴】

幕営地 BC 7:15 発—8:35 前岳—8:45 中岳 9:05—10:15 悪沢岳 10:45—12:45 幕営地 BC、午後は雪上訓練。

荒川三山の往復。今回の最高峰 悪沢岳からの眺めはすばらしい。快晴の360°の展望。北には塩見をはじめ南アの北部の山々が、東に富士山、西には中央アルプス、そしてはるか北アルプス。そして振り返れば堂々たる赤石岳、そのかげに聖岳、茶臼岳、はるか遠くに信濃俣(?)が頭だけのぞいている。遠かったなとしみじみ思う。明日の下山も決まり、夜は紅白歌合戦を聴きながら、この10日余りをふりかえる。

1月1日【曇のち晴】

7:55 発—10:50 広河原小屋 11:05—13:30 小渋—14:50 釜沢 15:30—16:40 大河原—タクシー(マイクロバス)—伊那大島駅

元日の御来光は、雲の間からちょっと顔を出しただけ。雪解け水の小渋川を素足で渡渉をくり返しながらの下山。ふり返れば、苦しさも思い出になってしまった白き山々。

* この2,3年、冬山における合宿がやや軽視されがちであった我がクラブにおいて、多くの問題点を残しながらも今回これだけの縦走ができたことは、大きな前進だったと思います。合宿の最終決定が12月に入ってからされるなど、他の山岳部から見れば無謀と思われるかもしれませんが、冬合宿を

必ずしも一年の総結集的位置に置いてなかった我が部にすれば仕方ない感じもします。出発直前までのコース、日程の議論、特にこの山域にメンバーのうち誰ひとり入ったことがないというのは、大きな問題でしたが、ともかく全員の意見一致のもとに出発しました。計画では三伏峠までのつもりでしたが、縦走前半において数人がカゼを引いたことなどのため荒川三山止まりとなってしまいました。しかし、聖岳、赤石岳、荒川三山と5つの3千メートルのピークに立てたことや、ともすればその位置的条件から敬遠されがちな光岳に立てたことなど、合宿としては成功だったと思います。また天候に恵まれ、完全な停滞日が一日としてなかったのは幸いでした。本当にきつい毎日でしたが、ピークに立った時のみんなの満足げな笑い、そして下山日を数え待ちながらも、下山日に感じた満足以上の去る寂しさ、山々へのなつかしさ、そんなところに縦走の良さがあるのではないかと思います。

(以上)